

巻頭言 放射線防護アカデミア —One teamになる

神田 玲子

Kanda Reiko

(国研) 量子科学技術研究開発機構



本号の特別企画が「スポーツと放射線」と伺い、巻頭言のテーマについて悩んでいたところ、放射線防護研究分野のネットワークについてではどうですか、とアドバイスをいただいた。「その心は」というと「One team」ということらしい。この「One team」とは「勝利という目標達成のため、人種や文化、キャリア等の違いを乗り越えて結束したチームになろう」というスローガンなのだそうだ。そこでやや面はゆいが、この流行語に便乗して、「放射線防護アカデミア（以下、アカデミア）」と「放射線防護アンブレラ（以下、アンブレラ）」についてご紹介させていただきたい。

「アンブレラ」は、量研、原子力機構、原安協が原子力規制委員会の委託事業内で構築している放射線防護関連機関のネットワークの名称である*。同委託事業では、アイソトープ総合センターをベースにしたネットワークも放射線教育と安全管理をテーマに活動している。放射線防護に関する課題の多くはその解決に分野横断的な検討が必要で、単独分野の研究成果で解決できるようなシンプルな課題は稀である。そこで、喫緊の課題をステークホルダーと共に解決しながら、専門家集団が自発的かつ学際的に放射線防護の科学政策から規制の反映に関わるための仕組みづくりを行っている。現在のアンブレラには、課題解決型ネットワークが2つあり、それぞれ、緊急時対応人材の確保と育成及び職業被ばくの個人線量管理に取り組んでいる。

アンブレラの中で、放射線防護関連の学術コミュニティ「アカデミア」は、課題の抽出や研究成果の規制への反映を担っている。日本放射線安全管理学会、日本放射線影響学会、日本放射線事故・災害医学会、保健物理学会が主な構成団体である。このアカデミアと課題解決型ネットワークが国内外の最新情報や問題意識を共有するために、1つの傘の下でプラットフォームを形成し、それぞれの団体の代表者から成る代表者会議が運営する—これがアンブレラの名の由来である。

近年、学会が細分化される一方、学会連合も次々と誕生しているが、アカデミアが目指すのは放射線防護の課題解決のための実務的組織である。お手本としているのは医療被ばく研究情報ネットワーク（J-RIME）である**。2010年に発足したJ-RIMEは、2015年に国内初の診断参考レベルを策定したが、線量の実態調査、医師・診療放射線技師・医学物理士らによる議論、国際機関の専門家からの助言等、策定に係る全プロセスが参加団体の自主的な取組みとして行われた。このJ-RIMEがOne teamになったのは、診断参考レベルを策定するという共通の目標があったことや、目標達成にすべての職種が不可欠であるとの認識が醸成されていたことによる。

アカデミアは、放射線研究のコミュニティに閉じており、かけ持ちの会員も多いことから、最初からOne teamかと思われた。しかし放射線安全規制研究の重点テーマを選定し、研究者不足について議論する中で、学会員の専門性や関心等に、学会間で違いがあることに改めて気づかされた。それは、合同の学術集会を開催するには望ましいが、合意形成にとってはWin-WinではなくNo dealになるかもしれない程度の差異である。しかしこの3年間、何一つNo dealになることなく、「線量の新概念の国内導入に向けた課題解決」を今後の目標として設定することができた。この解決には全参加団体の専門性が必要である。ここに来て、アカデミアはOne teamになる要件を満たしたのである。これには、学会からの代表者の方々の献身によるところが大きい。

アカデミアの持続的な運営のためには、委託事業期間内に1つでも多く成功体験を積み上げ、アカデミアの知名度と求心力を向上する必要があると心している。ぜひご指導ご鞭撻を賜りたい。

* 放射線防護アンブレラ事業については、<http://www.umbrella-rp.jp/index.php> を参照のこと

** 医療被ばく研究情報ネットワークについては、<http://www.radher.jp/J-RIME/> を参照のこと